

「習作指導の研究」序論

岡 利 道*

作文教育において、「何を書いたらいいのか」ということについての指導は、極めて重要なものである（勿論「どのように書いたらいいのか」ということについての指導もある）。「何を」にあたるものの一つとして、「見たこと」が挙げられる。作文学習者にとって、「見る」という営みは、たいへん重要なものとなるのである。作文技術を伸張させることと、「見る」という働きを深化させることは相関すると思われる。

「見る」ことの重要性を唱えた先達の一人が、西尾実（1889-1979、明治22-昭和54）である。西尾は、「習作としての写実」の重要性を認識するに至る。その経緯は、桑原（1998）によって詳らかにされている。「見る」ことの指導について、体系的・継続的な実践指導研究を展開した西尾。その成果を、桑原の研究からまとめてみよう。

西尾は、かねてから郷里長野で現場教師たちの指導にあっていた。昭和4年から、下伊那（下久堅小学校）での「山下卓造の綴方研究会」において、児童の作品の見方を懇切に説明するとともに、「写生」的訓練、即ち「習作としての写実」を強調するようになる。習作としては、個物を取扱うとよい旨が伝えられる。花鉢などの複雑すぎるものではなく、茶碗のような単純なものを習作させるように

指示が出される。

昭和6年にも、習作は、面白くない、主観的な気分のない単純な写実であり、単純なものの、例えば無地の茶碗などがよいと再説される。実に面白くなく、骨の折れることであるが、根気強く取り組めば、観る力・観察する眼が養われる、と励ますのである。昭和7年には、北安曇での研究会で、西尾は同様な発言をしている。観察的にするには、文学的効果を不問にした習作が必要である、それも、島木赤彦や斎藤茂吉の言うような写生ではなく、正岡子規がはじめに言った写生が必要である、と述べているのである。

岡としては、特にこの部分に注目したい。西尾は、正岡子規（1867-1902、慶応3-明治35）の写生文論に範を求めると明確に言い切っているのである。それも、早い時期の子規の考えである。西尾と子規をつなぐものは何か。「習作としての写実」が重要な手がかりとなることは確かである。習作とは、練習作品のことであり、絵画の分野でもよくなされているものである。桑原（1998）では、面白いことを書く（写生する、描写する、文学的なものを生み出す、科学的なものを生み出す）ために、面白くない習作（文学的ではない、観察し記述的に書く、明確にやる、よく観る、子規がはじめに言った写生で精確に詳しく丹念に見て書く、もっと克明に忠実にもっと面白くない正直な写生をさせ

* 本学初等教育学科学科長

ること、鍛錬)を積ませるということが主張されている。

西尾が注目した「子規がはじめに言った写生」とは如何なるものなのか。それを探るべく、本研究は始動する。本研究にとって、桑原(1998)、及び桑原(1993)は大きな指標を含んでいる。当然の如く、書くこと・綴ることの指導論を含む『西尾実国語教育全集』第三巻、及び別巻二は拠り所となる。そして、子規が「ホト、ギス」に書き残したものを、丹念に見つめていくことにする。

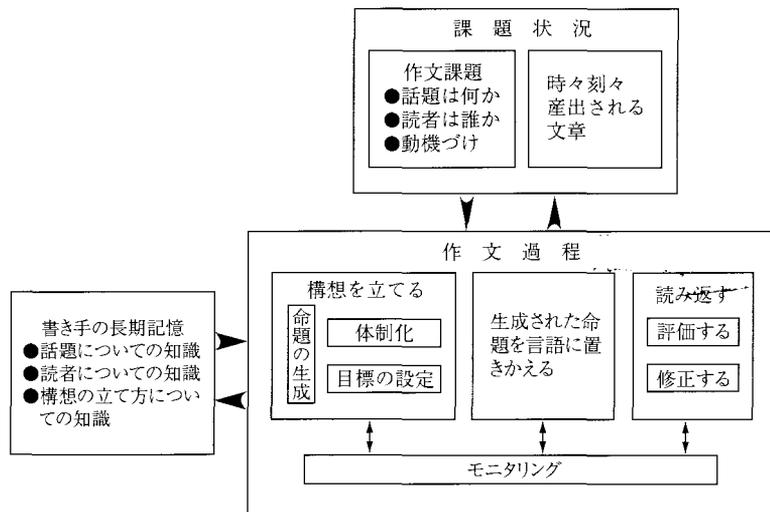
ここで、私なりに、「子規がはじめに言った写生」即ち「習作としての写実」の意義をまとめておくことにする。

作文過程の全体像を、Hayes and Flower(1980)の構想した「作文産出過程のモデル」に従うことにする。なお、図中の日本語訳は内田(1986)に従う。

ヘイズらの研究の対象は大学生であるが、児童生徒にもあてはまることであろう。短い文量

の習作ならば、そのモデルほど複雑な作業とはならないだろう。が、その仕組みの中で、習作者が最大限の力を発揮するならば、一般の長い作文を書くための有益な経験となるに違いない。即時的に、即「物(見ている対象)」的に作業が進行する。ゆえに、図中の、例えば、「作文過程」のボックスの「読み返す…評価する・修正する」ことなど、即座に、何度もできる利点が生まれる。長い作文を書くことと比較して、である。さらに、指導者が習作を添削するとしよう。対象が眼前にあり、添削する拠り所・基準が明確である。共有化されやすい。添削されたものは、習作者も指導者も納得づくのものとなるのである。お互いに、きわめて客観的に見ることができ、検討することができる。長い作文の場合だと、こうはいかない。このような習作の積み上げにより、学習者は見る力を向上させる。その力は、長い作文における描写表現をよりよいものにしていくことに、有効に働くであろう。

再び、子規の論に戻ろう。子規は、写生文の



作文産出過程のモデル (Hayes and Flower (1980))

理想を探るべく、彼が主催・編集する雑誌「ホト、ギス」において、課題文章を募集していった。その後、一日記事を募集するに至り、詰まるところ、「略叙と精叙」等の意匠・趣向（言わば「書くことの骨・要領」。「略叙と精叙」は濃淡とも言え、スケッチやデッサン、即ち習作で練成する技能と似る。）の発見に辿りつく。子規自身が書いた写生文とともに、彼が手を加え掲載した読者の投稿作品にも目配りをし、この写生文の要諦である意匠・趣向の実質も解明し、今日的意義を見出すつもりである。ここでは、先行研究である長谷川（1980・1981）、亀井（1980）、松井（2002）相馬（1973）、高橋（1997）、寺本（1982）等をふまえる。

なお、本研究は作文教育研究であるにも拘らず、文学作家である子規の考えを取り上げる。その意図を、ここで説明しておきたい。子規は、写生文の普及を図り、文学性を追求した。子規は、一般読者・成人全般を啓蒙しようとしたが、それだけではなかった。「ホト、ギス」読者のうち、小学校教員の人数も少なくはなかった。主催者であり、投稿文の一つ一つに丹念に目を通して子規自身、そのことを充分把握している。従って、子規は、教育現場及びそこでの作文（綴り方）教育を意識していたことは間違いない。また、読者の子弟の投稿もあり、学齢層への啓蒙も念頭にあった、と推察する。以上のことから、子規の考えに、教育的な意味を見取ることができる、と判断した。すでに、長谷川（1980）では、同様の指摘がある。

本研究のプロットは、以下のように考えている。

第一章 習作指導への着目

第一節 研究課題

第二節 研究方法

第二章 西尾実の「習作としての写実」論

第一節 西尾実の「習作としての写実」論の到達点

第二節 「習作としての写実」論の具体相

第三章 正岡子規の写生文論

第一節 「ホト、ギス」に見られる写生文の表現—正岡子規の場合—

第二節 「ホト、ギス」に見られる写生文の表現—投稿者の場合—

第四章 「見る」こと重視の継承

第一節 研究のまとめ

第二節 今後の課題

以上が、「習作指導の研究」序論である。

現在のところ、蝸牛の如き速度ではあるが、触角をしっかりと伸ばして先を見つめ、研究の伸展に努めたい。

〔参考文献〕

- 長谷川孝士、1980、『正岡子規 人とその表現』（松山子規会叢書第十一集）、三省堂
- 長谷川孝士、1981、『豊かな国語教室—原理・方法の探究—』（教え方叢書別巻）、右文書院
- Hayes, J. R. and Flower, L. S., 1980. Identifying the organization of writing process, In L. Gregg and E. Steinberg (eds.), *Cognitive processes in writing*, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, N. J.
- 亀井秀雄、1980、「写生文の意味するもの—文学における「意匠」と「労働」の自覚」『國文學—解釈と教材の研究—』昭和55年8月号、pp.69-71
- 国語教育研究所（編）、1998、国語教育研究大辞典、明治図書出版
- 桑原 隆、1993、『作文教育のダイナミズム（歴史的事例）—西尾 実・清野甲子三・山下卓造の軌跡—』、東洋館出版
- 桑原 隆、1998、『言語活動主義・言語生活主義の探

- 究—西尾実国語教育論の展開と発展—』、東洋館出版
- 松井貴子、2002、『写生の変容—フォントネージから子規、そして直哉へ—』、明治書院
- 西尾 実、1975、『西尾実国語教育全集 第三巻』、教育出版
- 西尾 実、1978、『西尾実国語教育全集 別巻二』、教育出版
- 小田切進・瀬沼茂樹（編）、1972、『ホトトギス』復刻版、日本近代文学館
- 相馬庸郎、1973、『もう一つのリアリズム—『ホトトギス』 募集日記の持つ可能性—』、『文学』 vol.41、岩波書店、pp.1-13
- 高橋 修、1997、『作文教育のディスクール—（日常）の発見と写生文—』、小森陽一・紅野謙介・高橋修他著『メディア・表象・イデオロギー—明治三十年代の文化研究—』、小沢書店
- 寺本喜徳、1982、『子規における「意匠」の変遷と写生文』、『松江工業高等専門学校研究紀要』第17号（人文・社会編）、pp.17-32
- 内田伸子、1986、『作文の心理学—作文の教授理論への示唆—』、『教育心理学年報』第25集、pp.162-177